

文

化

大阪府高槻市の山中で「ウナギの森植樹祭」を始めて10年になる。5月の第2日曜日に木材業界の仲間や森林保護活動をされている方、漁業者、料理店の大将、一般市民ら多彩な人たちが集まってヤマザクラやナラ、カエデなどの広葉樹を植える。落葉の腐葉土の養分は川から海に流れ、汽水域の生き物を育む。祭りは森と海のつながりを考える機会でもある。

万葉集にも登場し、千年以上前から食されてきたウナギ。関西には、キユウリと一緒にした酢の物「うなぎ」など酢と合わせる食文化がある。ウナギの頭「半助」を食べる習慣は、食材を無駄にしない精神の象徴ともされてきた。昔、ウナギの寿しは「宇治丸」と呼ばれていたそうだ。主産地は宇治川を含めた淀川水系の河川である。

そんな大阪のウナギを守るための活動のきっかけは、東日本大震災の被災地支援だった。木造住宅の全国組織の割り振りで私の会社、津田産業は

大阪のウナギ、森から育む

◇東日本大震災の被災地支援きっかけ、高槻で植樹祭10年◇ 津田 潮



植樹祭には漁業者や料理店の大将ら様々な人が参加する(左端が筆者)



宮城県気仙沼市での仮設住宅建設を担当した。

作業をする社員の宿舍を確保する必要があったが、津波被害を受けた沿岸部には見つからない。内陸に入った若手県一関市の室根山麓にコテージがあるのを知り、聞くと泊めてくれるという。5月から多い時は1000人ほどが現地に向いて作業を続け、3カ所に56戸の仮設住宅を約1カ月で建てることになった。

その室根山で1989年に始まった「森は海の恋人」植樹祭の仕掛け人が、気仙沼市の舞根湾でカキ養殖業を営む昌山重篤さん。森と海の関係に早くから着目し、上流域に落葉広葉樹の森を創ろうと活動を始めた方だ。仕事で宮城県に向いた際、昌山さんを訪ねた。

その後、気仙沼市で開かれた講演会にも出席して交友ができ、大阪の業界の会でも講演をしていた。2012年6月には「森は海の恋人」植樹祭に初めて参加。千人を超える人が集まる規模に驚いた。こんな活動を大阪でもできないか。

昌山さんの取り組みは水質悪化でカキ養殖が危機を迎えたことがきっかけという。大阪の海や川も以前は汚かった。近年は改善しており、淀川のウナギのブランド化を目指す動きがあることを知った。私はカキもウナギも好物。東北がカキなら大阪は淀川のウナギを育む森づくりを訴えよう。

植樹祭は大阪府木材連合会の行事として開催し、木を植える場所には淀川の支流、芥川の上流域にある山を選んだ。個人的にもウナギの生態を調べ、淀川の天然ウナギを出す大阪・北新地の割烹・味菜に向いて主人の坂本晋さんにも賛同を得て参加してもらった。

第1回は13年5月に高槻市立のキャンプ場近くの森林で開催。14、19年は天台宗の寺院、神峯山寺の寺有林を会場にした。20年はコロナ禍で開催を断念。21年以降は森林観光センター近くの民有林で植樹をしている。

記録的な暴風で各地に被害をもたらした18年の台風21号で、近畿では倒木が相次いだ。高槻の山

間部でも斜面全体の木が倒れた場所があちこちにある。個人の森林所有者が倒木を撤去して木を植えるのは困難で、植樹祭はささやかだが森の回復の一助にもなっている。日本の林業従事者は少なく高齢化が進む。木材自給率も近年回復してきただとはいえ4割ほどだ。

大阪府の森林面積は全国最小の5万5千畝。植林の拡大で倍になればと夢見ている。今月14日の植樹祭は、4年ぶりにコロナ禍時の規模縮小を解いて150人以上で開催する予定だ。大勢の参加者と意義ある植樹を楽しみたい。(つだ・うしお 大阪府木材連合会会長)